

令和元年5月21日現在

機関番号：14101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16900

研究課題名(和文) 海外戦没者の遺骨収容活動に関する人類学的研究：戦没者と多様な生者の関係に注目して

研究課題名(英文) Anthropological Study about the collection of the war dead in WW2

研究代表者

深田 淳太郎 (FUKADA, JUNTARO)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：70643104

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では第二次大戦において海外に残された遺骨の収容活動の変遷と現在の状況を、フィールドワークを通して明らかにした。この変遷は、戦没者が「個人」と「集合的戦没者」の二つの側面の間を揺れ動いてきたものとして理解できた。戦没者を直接見知った世代が遺骨収集活動において求めたのは、自分の家族や友人という「個人」であった。一方で1990年代以降、直接の関係が無い世代が収集活動に関わるようになると、戦没者は集合的にあるいは「数字」として取り扱われる傾向が強くなった。近年DNA鑑定が導入され、再び「個人化」への揺り戻しが起こっているが、これはかつての誰かの家族や友人としての「個人」とは異なってきている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

太平洋戦争の海外戦没者の遺体は戦後70年経った現在も現地に残されている。今後のこの問題への取り組みを考える上で、これまで、そして現在遺骨収集がどのように行なわれ、そこでは戦没者がどのような存在として捉えられているのかを理解することは極めて重要である。本研究では、遺骨収集の現場でフィールドワークを実施し、そこに携わる人々へのインタビューを通して、戦没者＝遺骨が、多様な生者との関わりの中で、顔と名前を持った個人としての存在から、数で数えられる集合的な存在まで、さまざまに異なる意味を帯びることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this study, I have clarified the transition and present situation of the collecting activity of the ashes of overseas war dead in the World War 2 through literature research and fieldwork. The dead, who cannot speak their own voice, appear through the activities of living people, such as the activity of collecting their bones. They have fluctuated between the two forms of "persons" and "collective war dead" according to the living people who approach them.

The bereaved or companions in arms who knew the war dead directly asked for "persons" with their own faces and names. But since the 1990s, when a generation that had no direct relationship with the war dead became involved in the activities, there was a tendency for the war dead to be treated collectively or as "digits". With the introduction of DNA testing in recent years, it seemed that there has been a resurgence of "persons". But this has come to be different from the former "persons" of someone as a family or friend.

研究分野：文化人類学

キーワード：遺骨収集 戦没者 記憶 DNA鑑定 ソロモン諸島

## 1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦において海外（沖縄を含む）で戦没した日本人は240万人にのぼる。日本政府は1950年代から海外での遺骨収集活動を実施してきたが、2013年時点で日本に帰還したのは全体のおよそ半分に過ぎず、現在も110万を超える遺骨が海外にのこされたままである。

戦後70年を過ぎた現在、すでに東南アジアや南太平洋の熱帯地域の未収容遺骨の多くは風化しつつある。と同時に、戦没者を直接知っている遺族や戦場で経験を共にした戦友も高齢化している。モノとしての戦没者の身体（遺骨）は消えかかっており、同時に顔と名前をもった特定の個人としての戦没者の記憶をもつ人々もいなくなりつつあるということである。このような物心両面における風化と、担い手の高齢化に伴い、1990年代後半以降遺骨収集活動は徐々に下火になっていった。

ところが2010年に硫黄島の遺骨収集活動に大きな予算が投入されるようになって以降、近年遺骨収集活動がにわかに活性化している。この近年の遺骨収集活動で実際に現地に行って遺骨の搜索・収集活動を行なうのは、戦没者を直接見知った世代ではなく、またその多くは孫やひ孫と行った血縁者でもない。こういった近年の遺骨収集活動の再活性化をどのように捉えたらよいのだろうか。そしてそこに関わっている人々はいかにして動機付けられ、またいかにして戦没者/遺骨と自分たちを結びつけているのだろうか。

こういった関心から研究代表者は、ソロモン諸島ガダルカナル島で遺骨収集活動を行なっているボランティア団体Aで、2012年から参与観察を行なってきた。本研究では、このボランティア団体の活動への参与観察を通して、実際の遺骨収容活動が現在どのように行なわれているのか、またそこで現在を生活している人びとと戦没者がどのように関わり合っているのかについて考察しようとしたものである。

## 2. 研究の目的

この問題に取り組む上で本研究で採用する視点は、遺骨をあらかじめ存在しているモノとして捉えるのではなく、生きている人間が働きかけることによって生じる現象として捉える視点である。先述の通り、すでに多くの遺骨は地中に埋もれ、風化しかかっている。それはもはや、生きている人間が発掘するという働きかけなくしては存在しえない。それを単にモノではなく現象としてみるということは、同時に働きかける生きた人間が誰であるかが変われば、またその働きかけの方法が変われば、遺骨という現象のあり方も変わるということである。本研究では、このような観点から遺骨収集を戦没者と生者の間の相互行為の結果として生じる現象として捉える。

このような方法をとることで、これまで遺族や戦友によって行なわれてきた遺骨収集活動における「遺骨」と、近年の「遺骨」は異なるものとして捉えることが可能になる。本研究では、この「遺骨」という現象が、歴史的に見てどのように変遷してきたのか、そして今後どのように変わっていくのかについて、多様なアクターのそれぞれの行為や、彼らの相互の関係を見ることを通して明らかにすることを目指した。

## 3. 研究の方法

### (1) フィールドワーク

ボランティア団体Aへの参与観察を中心的な研究方法とした。この団体は一年に一回、8月に二週間ほどガダルカナル島において遺骨収集活動を実施するが、その活動に参与観察するだけでなく、その活動の準備・訓練の段階から、報告書の作成までにすべての過程に参与し、内部から観察をおこなった。また参加者やその他の関係者へのインタビューでのデータ収集も実施した。

また、すでに大規模な遺骨収集が一段落している地域としてパプアニューギニアの東ニューブリテン州ラバウル近郊でのフィールドワークでは、1970年代の遺骨収集活動の手伝いをしてきた現地の人々へのインタビューを行ない、当時の遺骨収集団の活動方法や現地の人々との関係について調査した。

### (2) 文献調査

昭和館の図書室を利用し、おもに1960-70年代に南太平洋に派遣された実施された遺骨収集団の派遣記録などを収集し、遺骨収集活動の具体的なプロセスや参加した人々の手記などの分析をおこなった。

## 4. 研究成果

以下の三点を明らかにすることが出来た。

### (1) 戦没者と新たな世代のつながりと断絶

先述のとおりボランティアグループAの多くのメンバーは、戦没者と直接的な血縁関係を有していなかった。このことは彼ら自身明確が意識しており、それゆえに自分たちが遺骨収容に携わることによってどのような意義があるのか、あるいはそこにどのような正当性があるのか

については、活動の中で常に意識されていた。これは言い換えるならば、戦没者（遺骨）と自分たちの間になんらかの形でつながりをつくりだす必要があるということである。この問題の解決は主に二つの方向から試みられていた。

#### 戦友、遺族を介したつながりの確立

彼らが活動の中で気を付けているのは、戦没者と本来のつながりがあるのは遺族と戦友であるということである。遺族、戦友に敬意を払い、彼らから認めてもらうことによって自分たちが遺骨収容をすることの正当性を得ることが目指されていた。このグループ自体は戦友会と深いつながりを持っていたため、戦友が会合に招かれ、その経験を傾聴するということはしばしば行なわれていた。また実際のガダルカナルでの活動にも九十歳を超える実際に当地で戦った戦友が同行し、彼の証言に耳を傾け、実際にその進言で活動を行っていた。

#### 振る舞いを通しての戦没者とのつながりの創造

直接、戦没者を知らないということは大きな問題であるが、同時に実際に収容する遺骨の個人特定がなされることがほとんどないということも事実である。すなわち、遺骨＝戦没者は決して特定の名前と顔をもった個人としてではなく、個別化されないある種の概念としての集合的な「戦没者」としてしかあらわれてこないということである。

この集合的な戦没者に対応するものとして、彼らは自分たちを「戦没者をお迎えにあがった日本人」というというある種の集団として作り出すような実践を行っていた。この団体の収容活動は、非常に規律を重んじ、集団として行動するということが重要視されていた。特定の政治的な信条を持っているメンバーも多かったが、個人的な考えは集団活動の中では出さないこととされ、集団としてのまとまりに活動の重点が置かれていた。これは実際のガダルカナル島での活動だけではなく、国内での事前訓練から徹底されていた。このように個人のレベルを敢えて表に出さないことが、集団としての「戦没者」と集団としての「日本人」をつなげる方法として取られていた。

また、この団体の行動の規範などが非常に「軍隊的」なものであるということも重要な意味を持つ。活動地である熱帯の密林内での行動において「軍队的」な行動の方法は、実際に合理的な側面も持つが、それ以上に戦没者と同じような経験をすることに重きが置かれている。この行動パターンを「模倣」と捉えれば、これはメラネシア地域の文化人類学の重要な一つのテーマであるカーゴカルトの観点から考えていくことが可能であるかもしれない。この点は、今後深めていくべき論点として、今回の調査を通して得られたものである。

## (2) 集合的な戦没者の生成

(1)の で見た、戦没者の集合化は遺骨の風化や個人特定の不可能性に伴ってある程度必然的に生じてくるものであるが、その一方で遺骨収容活動を政府が進めていく上で、「個人の顔」ではなく「戦没者の数＝集合としての戦没者」を見ることは意図的に行なわれてきたことであるとも言える。実際、厚生労働省のホームページ上の遺骨収集活動の報告の最初に出てくるのは「〇柱収容」という数字である。数字は政府の業務執行の上で「成果」として計上し、継続的に遺骨収集を進めるためには欠かすことが出来ないものになっている。実際の遺骨収集活動の一連のプロセスを見ていくと、このような個別の死者を集合としての戦没者＝数字に変換していく様子を明確に見て取ることが出来た。

搜索・収集の過程で重要視されるのは、二重に数えないようにすることである。発掘がおこなわれる地点は必ずロープで囲まれて、個別に特定され、その上でGPSロガーで経度緯度を記録する。この時点で出てきた遺骨は、「A地点で発見された骨」になる。発掘された骨は次に洗骨される。泥や汚れを落として、骨の形を明確にするのである。洗骨された骨は、鑑定に回される。この鑑定作業では、第一に人間の骨であること（動物ではなく）、第二に日本人の骨であること（現地の人ではなく、また交戦相手国の兵士（ガダルカナルの場合は米兵）でもないこと）、そして第三に何人分の骨であるかが専門家によって判断される。さらに上手くいけば個人特定までいくが、私が関わったガダルカナル島の場合はそこまで至ったことはない。こうして鑑定を経て、山中から掘り出された「A地点の骨」は「ガダルカナル島山中のA地点から掘り出された〇柱の日本人の遺骨」になる。最終的に遺骨は日本に持ち帰る前に現地で焼骨されるが、この焼骨の段階でそれまで異なる地点での骨は混ぜないようにしていたのが、一緒にされる。焼骨式が終わると、すべてはまとめられて「〇〇年にソロモン諸島で発見された戦没者の骨〇柱分」という数値、成果に変換される。それは日本に持ち帰られ、千鳥ヶ淵の戦没者墓苑に納骨されて、厚労省のホームページに「成果」の数字として加算されるのである。

このような戦没者の集合化、デジタル化は政府によってだけではなく、もちろんボランティア団体の人々の手もそこに入っておこなわれるものである、同時にその数字の成果はボランティア団体が「成果」として支援者に報告する際にも重要なものとなる。

とは言え、ボランティア団体は、その「デジタル化」に葛藤がないわけではない。彼らは、自分たちの活動は「遺骨収集」だけではなく「慰霊」であり、戦没者の気持ちに寄り添うことであるということを繰り返し強調する。遺骨収集がどれだけ忙しくても、二週間の滞在期間中に必ずガダルカナル島の主要な慰霊碑の巡拝は欠かさず、また収容活動中にも宗教的な慰

霊儀式を必ず行なっている。すなわち彼らの活動においては、単純に戦没者の集合化が生じているわけではなく、そこには常に死者を個別の家族や無念さをもって亡くなった人間として捉える想像力が存在しており、むしろ根本的な動機付けはそちらにあるとも言える。

### (3) DNA 鑑定による戦没者の「個人化」の試み：抽象的個人化

2000 年代以降、少しずつ導入されるようになってきた遺骨の DNA 鑑定は、(2) で見たような戦没者の「集合化」とは逆に動きである。シベリアやモンゴルなど比較的寒冷で埋葬情報が残っている場所では早くから導入されていたが、2015 年以降南太平洋でも導入されるようになった。だが、実際の DNA 鑑定の様子を見てみると、二つの点からこれが戦没者を個人として取り扱うということに単純になるわけではないことも分かる。

収集された全ての遺骨が対象になるわけではなく、DNA 検体が比較的よく残っているとされる奥歯と、その歯に対応する顎の骨のペアが残っている場合に限り鑑定の対象となった。ここでは DNA 鑑定の対象となる個人の身体の顎と奥歯以外は、他の骨と一緒に焼骨されて集合的な戦没者となり、一部だけが「個人」になるという分裂が生じることになる。

また現状で DNA 鑑定は、個人特定に結び付く可能性が極めて低い。それは二万人が亡くなっているガダルカナルでは、戦没者の DNA 情報が分かったとしても、それを付き合わせる生存している可能性がある遺族の候補者は十万人近くになり、そのすべての人の検体を先ず集めることは不可能であり、またその数を付き合わせて個人特定することも極めて困難だからである。

したがって現在、ガダルカナル島の遺骨について行なわれている DNA 鑑定は、生前の顔と名前を持った個人という意味での、「個人」として戦没者を取り扱うこととは異なることであるとも言える。いわば、抽象的な「個人化」ということが言えよう。このデータが今後どのように用いられていくのかは追っていく必要がある。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 7 件)

深田淳太郎、不在の死者と骨のあいだ：ソロモン諸島・ガダルカナル島における遺骨収容活動を事例に、中部人類学談話会第 247 回例会、2019 年 2 月 23 日

深田淳太郎、遺骨と死者のあいだ：遺骨収集活動における骨と死者と生者の関係、日本文化人類学会第 51 回研究大会、2017 年 5 月 27 日

深田淳太郎、遺骨を掘る「遺」族になる：ソロモン諸島ガダルカナル島における遺骨収容活動を事例に、日本オセアニア学会第 34 回研究大会、2017 年 3 月 26 日

深田淳太郎、戦没者と生者のあいだ：遺骨（サブスタンス）による有／無縁化、国立民族学博物館共同研究会「グローバル化時代のサブスタンスの社会的配置に関する比較研究」、2016 年 12 月 17 日

深田淳太郎、遺骨のアートネクサス、経済／政治人類学研究会第 8 回研究会、2016 年 2 月 20 日

深田淳太郎、遺骨収集の終わり方：ガダルカナル島の遺骨収容活動における遺／残された骨をめぐる、日本オセアニア学会関西地区例会、2016 年 1 月 23 日

深田淳太郎、遺骨と遺された人々のつながり：ソロモン諸島ガダルカナル島に於ける遺骨収容活動を事例に、宗教と社会学会第 23 回研究大会、2015 年 6 月 13 日

〔図書〕(計 1 件)

秋道智彌、飯田卓、田中和彦、深山絵実梨、長津一史、鈴木佑記、山極海嗣、島袋綾野、玉城毅、小野林太郎、印東道子、深田淳太郎（共著）昭和堂、海民の移動史：西太平洋のネットワーク社会、(担当部分 pp.364-386、総ページ数 400 頁)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等 なし

## 6. 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。